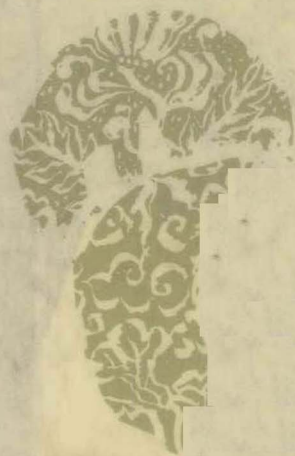


司馬遼太郎全集
2

風神の門





司馬遼太郎全集 第二卷

第二十六回配本 風神の門他

定価 一八〇〇円

昭和四十八年十月三十日第一刷
昭和五十六年十二月一日第五刷

著者 司馬遼太郎

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話(代表)〇三二六五―一二二

印刷所 大日本印刷

製本所 大日製本

製函所 トーシキ

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© RYOTARO SHIBA

Printed in Japan

文藝春秋

風神の門

司馬遼太郎全集 2

司馬遼太郎全集第二卷

風神の門

5

短編

最後の伊賀者

飛び加藤

果心居士の幻術

伊賀の四鬼

戈壁の匈奴

兜率天の巡礼

司馬遼太郎の世界
尾崎秀樹

527 489 467 449 427 411 391

装幀 三井永一
題字 中田 功
A D 粟屋 充

風 神 の 門

目次

八瀬ノ里	あまい肌	京の雨	猫の足音	濡れた夜	猿飛	黒屋敷	青姫さがし	真田屋敷	暗殺行	海道の月
------	------	-----	------	------	----	-----	-------	------	-----	------

9	15	31	46	62	69	86	104	131	155	176
---	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----

ちちろ斬り	駿府城	東軍西上	鷹ヶ峰	影法師	霞ノ陣	淀の川風	冬ノ陣	白椿	夏ノ陣
-------	-----	------	-----	-----	-----	------	-----	----	-----

207	235	253	270	284	314	325	338	351	360
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

八瀬ノ里

京から八瀬までは、三里ある。高野川をさかのぼって、洛北氷室ノ里をすぎると、にわかに右手に叡山の斜面がせまり、前に金比羅山がそびえて、すでに山里の感がふかい。木々のうら枯れた山あいの道を、馬を悠々とうたせて縫ってゆく武士があつた。

背が高く、手足がたくましい。

卯ノ花いろの地に銀糸をあしらつた派手なぞでなし羽織を着、蠟色鞆に金を蒔いた無反りの大小を腰に、一見、堂上の諸大夫か、諸侯の部屋住みの庶子といった風儀にみえた。それにしては供まわりをもたない。それだけではなく、色白の顔に目だけが異様にするどい点が、行きかう里人に、この武士の素姓の見当をつけかねさせていた。慶長十八年十二月のことだ。

「孫八」

と、馬上の武士が、手綱をもつ下人によびかけた。四十がらみの下人も、ただの様子の子ではない。おそらく焔硝で焼かれたものだろう、両まゆ毛と左目がなかった。右目

をかすかにあげて、
「なんでござる」
といった。

「降りる」

「八瀬ノ里までは、もうすぐでござる。がまんして乗って
おじゃれ」

「足先がこごえるわ。京とはなんと妙な所ではないか。氷室をすぎると、にわかに冷える」

武士は、馬からとびおり、ゆつたりと歩きはじめた。

背後の西空に、冬の陽が、ひえびえと落ちはじめている。
「人通りが絶えたな」

「このさき、里人にも会うことはござるまい。道は、八瀬で行きどまりでござる」

「あと、十丁もなかるう。早う、八瀬のかまぶろとやらで疲れをほぐしたい。背すじが、ぞくぞくとこごえるようにじや」

「霧隠との異名まである伊賀の服部才蔵どのも、意気地が無うなられましたな」

「そのはずよ」

武士は自嘲して、

「いくら金になるとは申せ、堺のあきんど衆の手先になつていては、身も心もなまるようじや。矢だまのなかで命をかけた昔がなつかしい」

「お若いのになにを申さるる。旦那さまのご出世はこれか

らでござるよ」

「出世？」

武士は、夕闇のなかで白い歯をみせた。

「サカイシ(堺仕)を百年つづけていても立身のたねになるものではない」

堺仕とは、伊賀の隠語である。堺商人のための、いわば商業謀報をする者の称で、慶長の初年以來天下に合戦のたねがつきたため、伊賀盆地に住むいわゆる伊賀者たちの仕事がなくなり、堺の商人にやとわれる者が多くなつた。この男も、そのサカイシのひとりである。かれらはおもに京や江戸の新府に駐在して、天下の形勢を大小となく堺へ通報し、堺商人は、その情報によつて思惑をしたりする。しかし、戦乱のなかに生きてきた伊賀郷士のあいだでは、この安穩すぎる仕事は、ほこりとはされなかつた。

「たいまつ」

と、才藏は孫八に命じた。すでに、街道に日が暮れおちていた。人の世には、そういうことがある。このとき、たいまつさえつけないければ、かれらがたどつた数奇な運命はあるいは他の者を見舞つたかもしれない。

孫八が石をきつてたいまつをつけたのは、三宅八幡宮の前であつた。ふと前面の叡山を見あげると、この夕暮に雲母坂をのぼる僧でもいるのか、中腹に数点の火のうごくのがみえた。

服部才藏は、すでに歩きはじめている。路上は、暗い。ともすれば足のおくれる孫八が、半丁ばかり先の才藏の影へ声をかけようとしたとき、にわかに、殺氣を感じた。(うつ)

身を沈めようとしたときは、すでにおそかつた。

馬がさおだちになつてゐた。孫八は手綱を捨て、とつさの機転でたいまつを足もとの高野川へ投げると、数歩走つて草に身を投げた。

馬は、槍傷でも受けたか、いななきながら崖をおちていった。

(何者か)

わからない。たいまつを目印に襲われたことだけはたしかだ。

孫八は目をあげて、才藏のいる方角をみた。

剣の触れあう音がした。数人の足音が、入りみだれていく。

(三人。……)

目をつぶり、耳でかぞえた。この男が加勢にゆかないのは、主人の才藏の腕を信じきつてゐるからだつた。

孫八は、地を這つて接近した。相手が何者であるかを見とどけたかつたのだ。

そのとき、低いうめき声がきこえ、ひとつの影が、丸太をたおすような勢いで、地上へたおれた。

「ひけ。人ちがいだ」

そんな声がした。死体をのこして、他の二人が、路上を風のように西へさして駆け去った。ほとんど、一瞬のできごとだった。

「旦那さま」

孫八が立ちあがって、云った。

「お馬を損じましたわ」

「そうか」

才藏は、死体のそばにうずくまっている。

「不用心だが、もう一度火をつけてみるがよい。まさか、あの者どもは、その辺にはいまい」

孫八がたいまつを近づけると、才藏はすでに死者の刀の目釘をぬき、つかを捨て、銘をしらべていた。

「平田三河守厚種とある。あまりきこえぬ名だが、三河の草鍛冶であろう。さきのことばに三河なまりがあつたが、いよいよ、この男、三河者と知れたな」

「徳川の」

「そうだ。家康の三河以来の郎従とみてよい。京にいる徳川家の者といえ、所司代の家来どもだらうか」

覆面をはずした顔は、むろん見おぼえがなく、衣服に定紋がない。ふところには、汗くさい手拭が一本あるきりで、なにもなかった。

服部才藏は、袴のほこりをはらって立ちあがった。

「どうなさる」

「死体は捨てておこう。人ちがいだったのだ。どうせ、わ

れらにかかりあいはない。……馬をひけ」

「それは、さきほど申しあげましたわい」

「なんと」

「損じた、と」

「そちは口が小うるさいわりには手がおそくできている。

あの馬は金二枚であがなったものだぞ」

「才藏さま」

といった。

孫八は、あるじを旦那さまとよんだり、その名でよんだりする。伊賀の服部ノ庄にある才藏の屋敷に飼われてそだったこの男は、その屋敷の二男である才藏のうまれたときから知っている。あるじというよりも、肉親の甥のように感じているのだろうか。

「馬一頭を損じたぐらいで、そのようにこわい顔をなさるのは、孫八は迷惑じゃな」

「不足か」

「サカイシになってあきんどの手つだいをなされば、申さることまでが、吝うなつた。以前は、そのようではなかったわ」

「こいつめ、おのれが損じておいて、おれにあてこするではないか」

才藏は苦笑した。

闇のむこうに家の灯がみえた。右手の高野川は、川幅が

急にせまくなり、瀬の音が、わくように高い。崖にかかっているのは、西塔橋であらうか。

「いよいよ、八瀬ノ里でござる」

孫八がいった。

この峡谷の里の名は、京や山城がまだひらけなかった古事記の時代から、その名が記録されている。里人を八瀬童子といい、天皇の葬儀には、御柩をかつぐ古習があった。

戸数はかぞえるほどしかない。

「訪ねる家は、たしか嘉兵衛茶屋と申したな」

「茶店へは飛脚にことづけておきましたゆえ、すでに支度をして待ちかねているでござらう」

云うまもなく、茶屋の者が、たいまつをかかけて西塔橋のたもとまで出迎えにきていた。

「斎藤縫殿様でござりまするか」

「いかにも」

才藏は、京における表むきの名を、肥後の阿蘇大宮司家の家来斎藤縫殿頼仲ということにしてある。肥後ならば遠国でもあり、偽名が知れることは、まずあるまい。

嘉兵衛茶屋は、母屋が溪流に面して建ち、ちかごろ建て増した離れが四つ、崖のうえにならんでいる。

才藏と孫八は、その西のはしの一屋に案内された。

「にぎわっているようだな」

といったのは、母屋の裏庭に乘馬二頭がつないであったからだ。それに、ここからはよくみえないが、東の離れ屋

の軒端においてあるのは女物の乗物らしい。

「いづれのかたが、お見えか」

「高貴のむきにござりまするか」

「お名は」

「はばかりまする」

（とすれば、よほど尊貴な身分の女とみゆる。あの馬は、女の従者のものであらう）

内心、持ち前の好奇心がもたげてきたが、そのくせ表情だけはむつとりとした横顔を見せて、才藏は床柱にもたれている。茶屋の者は、ぬぎすてた袴をたたんでいた。

ふと手をとめて、

「あの、これは血ではござりませぬか」

と、そのしみを凝視した。

「血だ」

「げっ」

「魚の血だよ」

才藏の、笑顔がいい。顔を融けるように崩すと、たいていの者は、ひきこまれるような親しみをおぼえてしまう。

その者も、笑顔をみて他愛もなく怖れが去ったらしく、

「安堵つかまつりました」

と息をついた。

「ふろの支度はできておるか」

「いえ、まだでございます」

茶屋の者はいそいで立ちあがって、

「あとでお知らせ申しましょう」と母屋のほうへ姿を消した。

八瀬の沐浴は、古来、特殊の法をもって諸国に知られてゐる。

湯をもちいなかった。

炭焼がまに似た巨大な素焼がまを築き、周囲からたきぎをもつてかまに火を加え、内部の空気が十分に熱したところで、浴客をかまの室内に入れるのである。

まず、ゆもじを着ねばならない。そのまま、室内のむしろの上に横たわるのである。むしろには塩が打たれ、アオキの葉が敷かれている。汗でゆもじが濡れはじめたころ、それをぬいで別室に移り、微温の湯のなかにひたるのだ。傷によく、疲れによく、疝氣によい。

京は近在に天然の湯をもたない。都の貴顕紳士が、冬のあいだ、八瀬にきて保養するのは、この諸国にめずらしい沐浴法があるためであった。土地が古いためにこの沐浴法にも伝説が多く、神武天皇の兄五瀬命が、ここで矢傷をいやしたという伝えもある。

「あない(案内)がおそいな」と才蔵がいった。

「おそらく、先客のために母屋が混雑しているのでござう。あないを待たずに参りましょう」

ふたりは、夜の庭に出た。

母屋のぬれ縁の下に、点々と庭燎がともされ、数人の雑仕がひかえている様子が、なんとなくみやびている。

「なるほど、よほど高貴な客に相違ない」

「乗物を見ると、姫御料人のようでござるな。沐浴なされているあいだに、たしかめてみましょう」

才蔵は控えノ間で衣服を解いて孫八に渡し、白いゆもじに着かえ、脇差を左手ににぎって、廊下を渡った。

かまは、二つならんでいる。

才蔵は、無造作にその一つの扉に手をかけて、なかに入ろうとしたとき、通りかかった少女が急にひざまずいて、手をあげ、

「あの」

といった。

「どうかしたか」

「そのおふろは、当家のしきたりとして、三位以上のかたがお用いになることになっております」

さすがに、御所の用をつとめるこの里らしく、位階のけじめがやかましい。

「おれでは不足なのか」

「肥後阿蘇大宮司家のご家来斎藤縫殿様ならば、七位におわしましょう」

縫殿とは、才蔵の偽称である。

「別の方へお通りねがいまする」

「いや、折角きた。引きかえすのも大儀ゆえ、押している

ことにする」

扉をあけると、なかは、たたみを八畳ばかり敷いた広さになっており、すみに、一穗の燈明が、かすかに闇をはらっている。なかは、暗い。

横たわると、アオキの葉の重い臭気にまじって、ほのかに沈香のかおりがただよい、かおりのなかに、気のせいかな女の肌の甘さがのこっている。才藏はふと目をひらいて、

（あの客の肌であらうか）

その客の名が、わからない。

才藏は、熱気にみちた素焼の沐浴室のなかで、三宅八幡宮の前で遭った刺客のことを考えていた。

（たしかにあれは三河者だった）

わかっているのは、それだけである。

（逃ぐるとき、おれを、人ちがいだ、と叫んだ。おれのどこを見違えたか。たれを斬ろうとしたのだらう）

世上は、物騒になっていく。

関ヶ原の合戦で覇をにぎった家康が、江戸に幕府をひらいたのは、慶長八年の二月のことであった。天下の諸侯は、こぞって江戸に屋敷をおき、徳川家に臣従した。

（とはいえ、関ヶ原の一戦は、たんに豊臣家の一奉行石田三成を倒したにすぎず、太閤の遺児秀頼はなお大坂にあり、遺臣に擁され、無双の金城にまもられて日々成人しつつあった。）

（内大臣秀頼はたしか、今年で二十二歳になる）

世間のうわさでは、故太閤恩顧の大名のうち、たとえば、故加藤清正の嫡子忠広、福島正則といった者は、秀頼成人のあかつきには、江戸の覇権をふたたび大坂にうつす策謀を秘めているという。……才藏は指を折って、

（家康の年は七十三だ）

才藏ばかりではない。いまや、天下の興味は、秀頼と家康の年をかぞえることに集中しているのだ。

秀頼は、日々壮者になり、家康は、日々、老衰する。家康が死ねば、かれひとりの武略と人徳に服従している外様大名は、背をひるがえして大坂に臣従するだらう。そのとき、天下は二つに裂け、ふたたび東西の激突がおこなわれることは、自然のなりゆきだった。

（家康は、自分の死の近いのを知っている。あせってもいよう。存命中に豊臣家をつぶさなければ、徳川百年の計がたため。とすれば、ことしあたり、あの老人はなにをしようか。かわからぬな）

そう見た。

が、大坂も、だまっていはいまい。

当然の工作をする。そうした東西の策謀は、京を中心におこなわれつつあるはずだった。

（そのあらわれか）

才藏の闇討のことである。むろん人ちがいではあらう。江戸方でも大坂方でもない伊賀の一郷士を討つ必要は、た

れが考えても、これはない。

（人ちがいをされるのも、なにかの縁ではある。幸い、三河者という糸口がある。このなぞを解きあかせば、なにやら、おもしろいものが出てくるかもしれぬ。……あるいは）

あるいは、と思った。なにか心の燃えたつのを覚えて、才蔵は、かまの中で立ちあがった。背をかがめ、扉をあけて廊下へ出ると、冷気が一時に肌にしみた。

廊下のむこうに、湯をあび汗をおとすための別室がある。才蔵は、ゆもじを脱ぎすて、戸をあけた拍子に、

（あつ）

とうめいた。

そこに、女がいた。身をかがめ、湯桶ゆづくをもったまま、才蔵のほうへ目を見ひらき、不意の闖入者になすところを知らない様子だった。

（これは、迷惑な）

いや迷惑なのは先方の女だろう。才蔵は一瞬とまどったが、退けばかえって恰好ちやうどがつかなくなると思い、声を低めて、

「失礼つかまつる。拙者はそちらを見ませぬゆえ、存分に湯をお使いくだされ」

そのまま女のそばを通りぬけ、窓にむかって立ちはだかった。湯殿は高野川の崖に面しているらしく、瀬音がしきりと聞こえてきた。

あまい肌

「添そい臥ふしたい」

才蔵は、京の室町の角にある人足口入業分銅屋くちいれぎようふんどうやの二階から、往來を見おろしながら、つぶやいた。

孫八が顔をあげ、

「え？」

「添そい臥ふしたいと申したのよ」

「たれと」

「その名がわかれば苦勞はせぬ」

「ははあ、左様でござるか」

孫八は、噛んでいたほし魚をすてて、歯をみせた。

「八瀬の湯殿で会った姫御料人に、才蔵様は恋を召されたな」

「恋などはせぬ」

「では、なんでござります」

「寝たい」

「おなじことではござらぬか」

「恋などは、公卿くぎのするあそびじゃ。扇投げか香かあわせか